

武井暁子、要田圭治、田中孝信（共編）、
『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』
東京：音羽書房鶴見書店、2013、3,000円、288頁

加藤 匠

今、私の目の前に一冊の本がある——タイトルは『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』。実際に本を開く前に訪れる至福の時間、それはタイトルだけを見て中身に思いを致すときにやってくる。よくCDやレコードを買う際に「ジャケット買い」という、ジャケットだけを見て実際の音を想像して買うというやり方があるが、それに倣うならば、さしずめ「タイトル買い」とでも呼ぶべきだろうか。

「都市化」ということは、やはり産業革命以降の社会史を踏まえた議論が行われるのだろうか。ひょっとしたら、鉄道も登場するかもしれないし、この都市化の裏の側面にあたる貧困問題も扱われるかもしれない。その関連で、メイヒューのルポタージュやエドウィン・チャドウィックが絡んだ衛生問題も登場するだろうか。そして「ヴィクトリア朝の放浪者たち」といえば、やはりディケンズが描いた印象深い人物たちが思い浮かぶ。彼が描く主人公たちは何らかの形で放浪しているし、何よりも作家ディケンズ自身が夜歩く人であった。勿論クイズではないのだからこちらの連想と実際の内容が合致するかどうかは問題ではない。こちらが予想もつかなかった題材が扱われていれば新たな視座を学ぶことが出来るし、重なっていたとしたらさらにその発想を突き詰めていくことも出来る。逆にこちらの発想が扱われていなかったとすれば、その本に潜在的に秘められていた可能性を開拓したということであり、さらに考えを発展させていくことも可能であろう。いずれにせよ、必ず何らかの見返りを期待しうる手法なのだ。

そのような過程を経て、ここでようやく『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』を開くことになるのだが、ざっと頁をめくると全く想定できなかった内容が並んでいる。ハーディは順当なところだとしても、ディケンズは作品ではなくアメリカ旅行記が取り上げられ、「急進主義者トムの系譜」や「生者たちのネットワーク」といった予測のつかないタイトルが並び、ヴィクトリア朝とは到底結び

つきそうにないV・S・ナイポールの名前まで登場するのだ。あまりの脈絡のなさに戸惑いつつも序章を読んでいると、編者である武井氏が本書の趣旨について説明する箇所に遭遇した。「本書は対象をイギリスに限定せず、アメリカ合衆国や旧イギリス植民地まで広げ、ヴィクトリア朝の人々の生に変容を迫った都市化という現象を包括的な視点で捉えることを主眼とした。そして都市化の結果放浪を余儀なくされた人間、または自らの意志で放浪する人間が内包する問題を文化・社会的視点から分析し、人間が生来持つ自由への願望を明らかにすることにより、繁栄の時代と言われるヴィクトリア朝とその文学を従来とは違う角度から読み解いていく」(33)とある。この文章だけでも、タイトルが想起させる範囲に留まらないほど、本書の内容が多岐にわたることは容易に想像できるだろう。場所が限定されず、「ヴィクトリア朝」と謳いながらもナイポールという現代作家を取り上げ、都市化という現象を包括的な視点で捉えるということは、こうした規模の論集では扱いきれないほどの潜在的可能性を持ってしまうことになるはずだ。その一例として放浪者の表象を取り上げるということなのだが、放浪者について扱われていない章も散見され、これではむしろ、「都市化もしくは放浪者たち」を扱った論集という印象を受けてしまう。論文の方向性がひとつに収斂していない以上、「ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち」について簡便に知りたいという読者にとっては、本書は格好の教材とは呼べないかもしれない。

だが、六篇の論文に、特別寄稿と序章が加わった計八篇の論考から構成されている本書の各章を読み進めていくとなかなか興味深い論考が多く、読者を飽きさせない。もちろん多種多様な内容ゆえ、読者の好みに必ずしも合わない章もあるかもしれない。したがって、冒頭から順に読み進めていく読み方でも勿論良いのだが、本書評では敢えて私なりの読み方を紹介してみたい。各読者でそれぞれ読み方を工夫してみるのも面白いだろう。

私ならまず、都市化や放浪者を歴史的に位置づけた武井氏による序章「産業革命の大いなる遺産と自由への渴望」と小池氏による特別寄稿「ルールが伝える怪物の引張り力」から読むだろう。国内情勢、海外情勢、人的資源をはじめとする複数の要因が相互に絡み合うことで世界初の産業革命がイギリスで起こったが、その影響から農業を基盤とした共同体は荒廃し、ロンドンに流入した貧困層の人々がイーストエンドに集まることとなった。まさにこうした人々の悲哀を描い

てみせるのが小池氏による特別寄稿である。『パンチ』に掲載された図版「土地に背を向けて」の歴史的背景を見事に解釈してみせることで、都市化の背景に鉄道網の拡張があり、都市にやってきた人々が放浪者となっていた可能性までを一気に読ませてくれる。

同様に急激な都市化に追い込まれた地方都市の労働者たちの悲惨な生活が社会問題小説を生み出したことを踏まえて、次に読むのは「マンチェスター・フィクション」を扱った、閑田氏による第三章「産業都市マンチェスターと急進主義者トムの系譜」である。「マンチェスター・フィクション」とは「産業革命によって出現した実在のイングランド北部産業都市を舞台とする、または舞台の下敷きとする、主に一八二〇年代からヴィクトリア朝中期にかけて執筆・出版されたフィクションの総体」(115)であり、社会問題小説の先行テキストにあたるものである。したがって、ギヤスケル以前のマンチェスター表象の流れを辿ることができる興味深い章となっている。まず一八世紀後半に大きな影響力を誇ったハナ・モアが取り上げられる。そして彼女の作品を研究して産業都市がはらむ問題を描く枠組みを学び自らの作品に取り込んだのが、社会問題小説の登場人物のステレオタイプを確立したハリエット・マーティノーであった。最終的にマーティノーはモア流の説教から離れて例解を用いるようになるとともに、宗教色を薄めてポリティカル・エコノミーの要素を前景化させたが、一方でモアの作品を同様に先行テキストとしていたシャーロット・エリザベス・トナは、ストライキを神への不敬行為で天罰に相応しいものとした。さらに「リジー・リー」でギヤスケルが強調する赦しの要素はトナ作品を先行テキストとした書き換えであると解釈されることで、マンチェスター・フィクションと社会問題小説とが接続されるのだが、こうした指摘はギヤスケルを歴史的コンテキストから考察する際のひとつの視座となりうるはずだ。

都市化を背景とする社会問題小説の源流を辿った後は、都市化しつつある社会の背後に潜む権力の問題を扱う、要田氏による第一章「都市、生者たちのネットワーク」を読みたい。都市化という現象を生み出したヴィクトリア朝という時代について、フーコーが「生きさせるか、死の中に廃棄する」としていた生権力の角度から論じたものである。都市表象をはじめとする解剖のメタファーの広がりをめぐる議論が精緻に展開されており、中途半端に要約したところで本論のロ

ジックの魅力は伝わらないと思うが、個人的には「スペクタクルと痛みが喚起され、法の峻厳さが喚起されている」(55) 死の権力の時代から、医療や公衆衛生問題だけではなく、住宅や都市構造を通じて人の生命に介入する生権力の時代への移行——前者の時代を象徴するのが『オリヴァー・トゥイスト』であり、後者は『荒涼館』を生み出したとされている——が一九世紀を特徴づけるものとして位置づけられていたことが興味深かった。都市化や放浪者という具体的な事象を軸とした論考が多い本書においては異色の章ではあるが、それらの背後にあるものの一端を垣間見せるという意味で有益な章であろう。

そして都市化を背景とする放浪者に対する人々の両義的姿勢を取り上げた、田中氏による第六章「放浪者への眼差し」へと進みたい。中流階級の価値観から逸脱した、時には伝染病の感染源となり、犯罪に手を染めることすらある、恐怖の対象として放浪者を管理統制しようとする動きのなかで、彼らは男性性を喪失したとされ、同性愛者と同一視された。こうしたイメージは救貧院に潜入取材を試みたルポルタージュに反映され、拡散していった。こうした姿勢の対極に、ジプシーに魅せられたジョージ・ボローや「学者ジプシー」を書いたマシュー・アーノルドのような、放浪者に付与された自由に対する憧れを感傷的に描く作家たちの姿勢があった。非社会的存在で実態の把握が困難な存在であるからこそ、放浪者は定住型社会に属する作家たちの欲望を誇張した形で映し出す鏡だという指摘には頷くばかりであった。

そして放浪を余儀なくされた人間ではなく、自らの意志で放浪した作家ディケンズのアメロカ旅行記を扱った、松本氏による第二章『『自由の国』での不自由な旅人』へと戻ろう。松本氏が注目したのは、アメロカ旅行の際にディケンズが経験した、触覚以外の五感を失い、ディケンズにとっては監獄に生き埋めになっているに等しい少女ローラ・ブリッジマン、「精神の働きを破壊する」とディケンズが強く批判していた分離方式を採用するイースタン懲治監、そして滞在中のディケンズを襲った名士であることに伴う不自由という三点の「不自由」であった。氏の論文で見事なのは、ディケンズはこうした経験を通じて「自分が自分の主人でいられないこと」の恐怖を体験したと論じながら、「別の人間になりたい」という演劇欲を抱き、「自分の身柄と作品に対する所有権を主張」できる公開朗読につながったと、説得力のある形でアメロカ旅行とディケンズの晩年の活動と

を見事に結びつけてみせたことだろう。従来の研究では国際著作権問題や奴隷制度への嫌悪感という観点から論じられがちであった『アメリカ紀行』を新たな角度から論じた好論である。

そして次に読むべきは、散漫な印象を受けざるを得ない本書のなかでも、『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』というタイトルが最も合致し、本書の柱と位置づけうる、武井氏による第四章「崩壊するウェセックス」であろう。まず武井氏は、ハーディが描くウェセックスが農業共同体で、科学技術と合理性から隔絶された、敢えて文明化の影響を受けない地域とされていたと指摘する。しかしハーディは徐々に機械化をはじめとする変化と関わるようになっていった。『キャストブリッジの村長』では新旧が混在し、都市化や文明化が進行しつつある町の姿が描かれ、『ダーバヴィル家のテス』では農業不況を根本的な原因とした移住へとテスが追い込まれていくことになる。ハーディ自身は近代化以前のウェセックスに思い入れがあり、農民が放浪者となる生活を田舎の美点である素朴さが失われたものと嘆くのだが、文明化の波は町にやってくる鉄道同様、押し留められないものであった。労働者と土地が結びついた社会を理想としたハーディが、あえて農民の流出につながる文明化を作品から排除しようとしたという指摘が、説得力のある形でなされている。

ここまで読み進めてきて考えざるを得ないのは、本書のように論文の方向性がひとつに収斂せず、都市化という、こうした規模の論集では扱いきれないほどの潜在的可能性を持つテーマが扱われている論集の場合、読者の側にもこのテーマに積極的にコミットすることが求められるのではないかということだ。冒頭で述べたような手法を用いることも有効であろうし、読んでいる過程で得た閃きをさらに突き詰めていく作業が読者にある種の義務として課せられているように思える。例えば本書では人種という観点が欠落しているが、サッカー『虚栄の市』やいくつかの絵画に描かれているように、ヴィクトリア朝期には黒人の姿を見かけることも決して珍しくはなかったはずだ。そうした黒人たちが放浪者となる可能性はなかったのだろうか。

読者ひとりひとりが自身の専門で考えることを求められているとすれば、梅氏による第五章「奴隷船に代わる船」はその実践例として解釈することが出来るはずだ。「ヴィクトリア朝」と「都市化」というキーワードを外したとしても、「放

浪」という観点を突き詰めることで、V・S・ナイポールをめぐる論考は十分に成立している。換言するならば、ヴィクトリア朝期には考えられなかったスケールで「放浪」を軸としたナイポールを取り上げることで、ヴィクトリア朝を超えて二〇世紀、二一世紀へとテーマが拡大されているのだ。

梅氏はナイポールを「定住と放浪」、「安住と冒険」とに深く関わった作家であり、作家生活を通じてそれを反芻した作家と規定する。そもそも彼の祖父はインドの村からトリニダードへと渡った人物であり、「インドに出自を持つ自分がなぜ遠く離れたトリニダードに住み着くことになったのか」ということを書き続け、移動行為の意味を問い続けているのがナイポールという作家なのだ。その移動の特徴について、梅氏は「大きな空間」を舞台とし、宗主国の首都という中心を經由したうえで、再び世界の様々な旧植民地へと向かうと指摘しているが、ナイポールは同時に近代と前近代の断絶や、妻の実家の要求に不本意ながらも屈した屈辱的な経験をもつ父シーバサドが繰り返した放浪についても、『ビスワス氏の家』で描いた。ナイポールの後半生の活動は、『世の習い』に見られるように、かつて旅をした地をもう一度訪れるだけでなく、かつて書いた複数の自作の世界に立ち戻るといふ二つの再訪から成立していたという指摘を待つまでもなく、放浪という主題は現代の作家にも確実に影を落としているのだ。現代の作家を本書の枠組みの中にこれだけ組み込むことが可能だというのなら、時代と場所というコンテキストを共有するヴィクトリア朝期文学の研究に本書が貢献する可能性は決して少なくはないはずである。

(明治大学 兼任講師)